

現在のわたしにとって、最大の関心事は、「児童文学で何ができるか」ということである。これには大まかにわけて、二つの方向がある。たとえば、『ゲド戦記』を書いたアーシユラ・ルীগウィン、あるいは『フランバード屋敷の人びと』を書いた

## 私の研究

### 児童文学との関わり方

上野 瞭

TREL Books, 1975) に見られるように、「なぜ子ども本を書くか」という作家の発想の問題も含まれる。いま一つの関わり方は、文字通り、じぶんが作品を「書く」ことによつて、児童文学の在り方や可能性を探ることである。

第一の関わり方は、わたしの場合、かな

らずしも海外作家の検討から始つたのではなかつた。わたしの最初の本『戦後児童文学論』(理論社・一九六七)は、日本児童文学の脆弱性を、作家たちの状況把握の図式性から照明しようとしたものである。

海外作家の作品と日本の児童文学を「現代」という視点から等質にとらえようとしたのは、『現代の児童文学』(中公新書・一九七二)である。ここでは児童文学を三つの発想法に分類し、その拮がりと深まりを確かめることにより、そのこと自体が、児童文学とは何か」という問いを解明するよう努力した。

児童文学を孤立した一領域としないために、成人文化、あるいは絵本、漫画と共に考えようとしたものが、『われらの時代のピーター・パン』(晶文社・一九七八)である。ここでは、現代作家とポターのような古典的絵本作家が並列的に登場する。こうした個別の作品世界とその発想を、一つの視点でとらえることが、これからのわたしの課題である。

第二の関わり方は、『ちよんまげ手まり歌』(理論社・一九七八)から始つた。もちろん、それまでいくつかの試みがある。たとえば、大学四回生の時に、畏友・片山寿昭(現文学部教授)の全面的支援で出版した私家版の童話集『蟻』もそうなら、高校教師時代に書いた『空は深く暗かった』

(二一書房)もそうである。それらは、わたしの現代児童文学を確かめるための一里程標だったと考えている。

状況と人間の関わり方を児童文学という形で追求したのは、『目こぼし歌こぼし』(あかね書房・一九七四/現在は講談社文庫)と『日本宝島』(理論社・一九七六)である。共に、「なぜ日本では、スティーブソンの『宝島』のような作品が存在しないのか」ということが引き金になっている。もちろん、それをこえる現代の独自の物語の創造ということが意図としてある。また、「状況と人間の関係」を問いつめる一方、ファンタジーへの試みとして、『もしも』、こちらライオン』(理論社・一九七八)を書いた。これは「お子さまランチ」的な幼年童話への挑戦である。

ところで、今、二年ごしの長篇『ひげよ、さらば』(猫たちのバラード)を、「子どもの館」(福音館発行)に連載中である。最初の構想から物語は離脱し、海図のない海を帆船が漂うように、登場する猫たちは勝手な道をたどりはじめている。だから、児童文学を「研究対象」などと、とてまつまてはられないのである。

(女子大学教授)